

スリランカのシンハラとタミルの対立

林 明
(弘前大学)

ご紹介にあずかりました林です。私はもともとインドのマハートマ・ガンディーやガンディーの運動を継承しようとしたヴィノバ・バーヴェーや J. P. ナーラーヤンに興味を持っていましたが、たまたま1990年から3年間スリランカに行くことになり、スリランカにも興味を持つようになりました。私がスリランカに行ったのは、外務省の専門調査員としてですが、その時与えられた辞令が「スリランカの民族紛争の調査を命ずる」ということでしたので、シンハラとタミルの対立という問題に詳しくなりました。しかし、この問題だけ話していませんと、なにかスリランカというのは大変な国のように思えてしまうかもしれません。実際は、皆非常ににこにこしている、自然もとても美しい、いい国でして、本当はこういった面をわかってほしいということを申し上げた上で、今日は紛争ということでお話します。

紛争の原因として注目したい点

先ほど月村先生ともお話ししていて、大分ユーゴの紛争の起こってくる事態と共通のところもあるといろいろ感じたのですが、そういったところもからめながら話してみたいと思います。

スリランカという国は、インドの東南にある真珠のような形をした国です。スリランカ全体の人口は1800万人ぐらいであり、人口の約4分の3を占める多数派のシンハラ人とそれから少数派のタミル人などが住んでいます。シンハラ人は、仏教徒が中心で、主に南と西の方に住んでいます。それに対し、タミル

人は、ヒンドゥー教徒が多くて、北と東の方に多く住んでいます。今ここでは、シンハラ人を中心とする政府軍と、スリランカ北・東部のスリランカからの分離独立を目指すタミル人の過激派の LTTE という、タミル・イーラム解放の虎との戦争が、10年以上続いているのですが、私はそこに1990年から93年までいました。そこでいろいろ政治のあり方などを見てみましたが、今日までのあり方もほぼ変わっていないので、だいたいその時分析した視角が今日までも通用すると思われれます。

まずこの紛争は、その原因が、単純にタミル人がシンハラ人に差別されているとか、タミル人とシンハラ人層の間の経済的矛盾があるとかそういったものではなく、またよく政治家などによって言及されているように、過去2000年ぐらいから続いている、そういった長い民族的な因縁の対立でもありません。この点を最初にお話ししたいと思います。それからこの紛争は、単にシンハラ人对タミル人というものではなく、シンハラ人とタミル人社会内部の矛盾を、お互い相手の民族に転嫁するという、そういう要素もあるわけで、そういった点を理解しなければいけないのです。それに加えて、スリランカの場合事情が複雑なのは、この紛争は国内事情だけでわかる問題ではなく、南インドにタミル・ナードゥ州という、スリランカ北・東部のタミル人と同じ民族の人たちが住んでいまして、この州政府がかなり大きな影響を与えていることです。しかも、このタミル・ナードゥ州が6000万人もいる、インドの中でも結構重要な州ですので、これがまたインドの政策に影響を与えているという事情も考えなくてはいけない点です。

今言ったことに鑑みまして、特にこの紛争の原因として私を感じたところは、この紛争はこれまでしばしば言われてきたように、スリランカの独立前の時代から強い形で存在していたのではなく、主に独立後の政治によって「もたらされた」とか「作らされた」という点です。この点は先程の月村先生の話とも共通するところがあって、政治のあり方が紛争を悪化させているという点を強調して述べたいと思います。その次に、第二の点として、シンハラ人社会内の矛

盾を、タミル人側にしわ寄せする形で起きたという点、第三に、タミル・ナードゥ州とかインド中央政府との関係でさらに紛争が複雑になってしまったという点、そういう点を中心にお話ししていきたいと思います。

独立後の政治と紛争との関連

最初に、独立後の政治との関連ですが、この部分を一番強く述べたいと思います。もちろんこの紛争にはいろいろな原因が考えられるのですが、今日あるような形での紛争を生じさせたのも、またその解決を遅らせているのも、最大の原因は、独立後の政治にあると私は考えています。私がスリランカにいた3年の間にも、何度か民族問題解決案を作ろうという動きがあったのですが、それがことごとく潰されていまして、今日でも相変わらず同じようなことをやっています。その潰され方もほとんど同じ経緯でなされているのですが、その点をお話ししたいと思います。私がいた3年間の状況を話す前に少し歴史をさかのぼってみますと、一般的にシンハラ人とタミル人が対立することになった直接のきっかけというのは、1956年のシンハラ語公用語法案というものに求められます。この法案を持ち出したのは SLFP (スリランカ自由党) ですが、このリーダーの S. W. R. D. バンダーラナーヤカ自身の考えは、もともとは、シンハラ語を公用語化することには反対であったわけです。彼も理性的に考えれば、このような法案を出せば、これが当然タミル人の反発を食うということはわかっていたわけです。しかし、もともとこの人は UNP (統一国民党) に属していて、ここの中の権力争いに負けて、新しい政党を作ったわけで、そうすると UNP は強大ですので、これに勝利するためには多数派であるシンハラ人の票を獲得できるような政策を掲げざるを得なかったという事情がありました。彼は1956年というのが仏陀生誕2500年にあたっていた状況を利用し、仏教僧侶も動員しながら、シンハラ・ナショナリズムに最も訴える言語問題を持ち出したのです。また、普通のシンハラ人一般に対しては、シンハラ語が公用語になれば、今まで英語を使えなかった人たちも職が確保できるなど、いろいろな利益を説いた

のです。この人は、タミル人を敵対させようと思ってこの法案を出したわけではないのですが、結果的にはタミル人を敵対させてしまった上、今まで強固な形であったわけではないシンハラ人のアイデンティティーができあがってしまい、またタミル人のアイデンティティーもそれにつられる形できあがってしまったわけです。それまではシンハラ人のエリートとタミル人のエリートの結びつきが強かったり、むしろ同じシンハラ人あるいはタミル人でもエリートと大衆の距離はかなり大きかったり、それからまた同じシンハラ人の中でも、高いところに住んでいるキャンディ辺りのシンハラ人と低いところに住んでいるコロombo辺りのシンハラ人とは大分アイデンティティーが違っていたりしたわけですが、そういう形でアイデンティティーのあり方もまた変えてしまったというところがあるわけです。

この法案は当然タミル人の怒りを買うわけで、シンハラ語公用語法案に反対するタミル人の反発を受けると、その翌年の57年には、タミル人の政党である連邦党の指導者チェルヴァナーヤカムと交渉して、ここでいったん妥協が成り、タミル語を少数民族の言語として認め、北部と東部の地域の行政はタミル語によることなどで合意しています。これはバンダーラナーヤカ・チェルヴァナーヤカム協定と言います。ここでうまく収めておけばまだよかったのですが、今度は僧侶が出てきまして、これはシンハラ人に対する裏切りであるなどという演説をし、また野党側のジャヤワルダナという人が、キャンディまで協定反対の行進をした結果、バンダーラナーヤカはせっかくまとまった協定を58年5月に破棄してしまったのです。これは、実はとても大事な構図でして、つまり与党が民族問題解決案を提示すると、野党はそれに同意せずに、民族問題を与党攻撃のための政治の道具として利用して、与党の民族問題解決の試みには協力しないという構図です。これは基本的に今日まで続いていまして、このような形で出しては潰され出しては潰されで、タミル人の方ももうそれでは埒があかないということで、結局過激派が出てしまいます。ですからたとえ現在、57年にまとまったときの妥協案を出しても、今はもっとタミル側の要求も過激化し

ていますから、もう当然そのぐらいの案では納得できないところまできていて、どんどん事態が悪化しているわけですね。例えば65年にも同じようなことがありまして、今度は先程野党だった UNP が与党になるのですが、この時の首相が、やはり同じく連邦党の指導者のチェルヴァナーヤカムとの間で同じような内容で協定を結び、これもいったん合意がなされます。しかし、今度は先程同じような協定を作った SLFP が野党に回っているために、このような法案を成立させてはいけないという大集会を、SLFP のリーダーのシリマウォ・バンダーラナーヤカという人が開いて、結局この協定も破棄されてしまいました。そしてこのようなパターンが今日まで続いているわけです。

野党が、与党の提示した民族問題解決案に反対するのは、功績を政権党のものにしたくないためですし、野党はまた、与党の提示した案がタミル人に譲歩し過ぎであるという口実のもとでシンハラの世論に訴えて、ほとんどの場合反対してきています。それでも与党がしっかりして、いくら野党に反対されてもがんばると言えはいいのですがそういうことはなく、時の与党も、タミル人に譲歩し過ぎたということでシンハラ世論の支持を失ってしまうと選挙で負ける可能性が非常に高くなるので、反対が高まるとせっかく提示した解決案を撤回してしまうのです。こういう過程を繰り返すうちに、タミル人勢力の中からも、政党による運動に幻滅し、政府と武力で対決して分離独立を目指す LTTE のような組織もできてしまうということです。

このようなパターンは、私がスリランカにいた3年の間にも同じような状況でして、トンダマンという人が1991年12月に民族問題解決案を提出したのですが、これも野党の反対で潰されました。また1992年11月、シュリニヴァーサンという議員が民族問題解決案を提出したのですが、これも野党の反対で潰されています。潰す理由は同じで、それはタミル側に譲歩し過ぎであるということでした。現在でも全く同じ状況のようで、与党が何か作ると野党はあまり賛成しないというようになっています。野党も与党も両方とも問題があるわけです。もう少し詳しく話したいのですが、一応そのような選挙と結びついた政治に問

題があるという点を指摘しておきたいと思います。

・シンハラ人、タミル人社会内の矛盾

次に、シンハラ人、タミル人社会内の矛盾というところですが、これを幾つかの点に注目しながら述べます。最初は、入植政策です。シンハラ人はスリランカの主に南と西に住んでいると申しましたが、こちらは人口が多い地域でありまして、人口の比較的少ないのが北と東の主にタミル人多住地域です。この土地問題を解決するために、政府は独立後、タミル人の多く住む北と東の方にシンハラ人を多数入植させるという政策を採ってきました。これはタミル人にとってみれば土地を奪われたという感じを受けてしまうことになりまして、シンハラ人社会の中の人口の過剰な問題を解決するためにタミル人側にしわ寄せが行く形になっているわけです。つまりももとはシンハラ人社会内の矛盾であるものを、タミル側に押しつける形になってしまうという問題です。

そのような例として大学入試政策の変更もありました。1970年にシンハラ人に有利になるように大学入試政策が変更されました。それまでタミル人は理科系の学部、特に医学部とか工学部などの入学においてシンハラ人学生より非常に多く合格してしまっていて、そのような職種への道が開かれていたのですが、シンハラ人の雇用問題と関係してシンハラ人がそういった職種を求め始めたのです。平等に試験したのではタミル人に負けてしまうということで、シンハラ人は点数が低くても合格できるように変更されました。これは現在はまだ違っていますが、これもシンハラ人社会内の問題をタミル人側にしわ寄せしているという要素であります。

それからあともう一つ申しますと、1977年に先程述べました統一国民党のUNPが急激な経済自由化政策を採るわけですが、これによって貧富の差が拡大しまして、農村における失業者数が増加するわけです。これはシンハラ人の農村の青年の問題ですが、結局彼らの不満のはけ口が、少数派であるタミル人に向けられます。これも先程述べたのと同じ、シンハラ内部の問題がタミル側に向

けられてしまうということになっています。

一方、タミル側の方は LTTE という過激派などを始めとしてほかにも過激派がいくつかあるのですが、これらはカライヤールとかナラヴァールといった中層とか下層のカーストの者が多いところに特徴があります。これは、今まで議会で勢力を持っていたタミル人政党が、わりと上層カーストのヴェッラーラが主体になっていたのに対し、中層・下層グループが政治の主体となるために、タミル民族運動を急進化させていくというタミル人社会内の変動とも大きな関連を持っています。つまりタミル内部の問題がタミル民族運動の急進化・過激化という方向にも向かうという、そのような視点も入れておかななくてはけません。

タミル・ナードゥ州及びインド中央政府と紛争の関係

最後に、スリランカの民族紛争とタミル・ナードゥ州及びインド中央政府との関係です。先程も言いましたように、このタミル・ナードゥ州というのがスリランカの背後に控えておりまして、このタミル・ナードゥ州の州民はスリランカのタミル人が苦境に陥ると、彼らを救うべきだという声をたびたび上げてきました。特に80年代にです。83年7月にシンハラとタミル民族間の大暴動がスリランカで発生して、多数のシンハラ人とタミル人の殺し合いが行われるわけなのですが、そうするとタミル・ナードゥ州の二大政党である AIADMK と DMK とが、両方ともタミル人を救うために何とかすべきだという、どちらがよりタミル人を救えるかという、そういうある意味では競争のようなことを行いました。与党の AIADMK はインドの介入を求め、野党の DMK はインド軍を派遣するべきだというもっと過激な方向を主張しました。このように AIADMK と DMK というタミル・ナードゥ州の政争の道具にスリランカの民族問題が使われ、それによってインドが介入してきて複雑になってしまうということがあるわけです。最終的には87年に、インド平和維持軍というのが送られてくる事態にまでなりまして、スリランカの紛争はこれによってますます複雑化してしま

いました。ただタミル・ナードゥ州のそうした政党というのは、スリランカのタミル人のことを思っているというよりも、自分たちの州にいるタミル人の動向が気がかりなのであって、90年になりタミル・ナードゥ州の中のマドラスという最大の都市で、LTTE と争っていた過激派の党首のバドマナーバーという人がマドラスの州内で殺されるなどという事件が発生してくると、今度タミル・ナードゥ州の州民は LTTE に対する感情が反感へと変化してきました。そうするとその当時野党だった AIADMK のジャヤラリターという指導者が、州民が反 LTTE 感情になったのを利用しながら LTTE 支持を掲げていた与党の DMK から政権を奪回する、ということも起こったりしています。結局、政党は、タミル・ナードゥ州の人たちの声によって動いているだけであって、別にスリランカのタミル人のことを思って動いているわけではないのです。例えばスリランカのタミル人が多数難民としてタミル・ナードゥ州に逃れていくわけですが、タミル・ナードゥ州民の声に押されて、タミル・ナードゥ州政府がスリランカのタミル人に好意的であったときは難民の地位も安泰であるけれども、反 LTTE 感情がタミル・ナードゥ州民の間で強まってくると、今度は、タミル・ナードゥ州政府は、難民の中にも LTTE が混じっているのではないかという恐れから、難民に対する扱い方が厳しくなり、彼ら難民が非常な苦難を被る、つまり一般の人たちが被害を被るわけです。こういったタミル・ナードゥ州のスリランカの民族問題への介入というのは、問題をより複雑化させているだけ、という性格が強いわけです。

インド中央政府にしても自己の思惑から働いているのは、同じことです。インド中央政府がどうしてこの問題に介入するのかという一つの理由は、タミル・ナードゥ州というのは6000万人もいるインドの中でも非常に大きな州であり、国会における議席もかなり持っていて、タミル・ナードゥ州政府の意向をある程度汲んでおかないと、タミル・ナードゥ州からそっぽを向かれてしまうということがあるのです。インド中央政府は、別にスリランカのタミル人やシンハラ人のことを「特別思って」介入しているわけではないわけでした、

それがインド平和維持軍の派遣などにもつながっており、問題を非常に複雑化させています。

ただ最近、インドはこの問題にはあまり介入しないようになってきました。それは91年に、LTTE が暗殺をしたとされているんですが、ラジーヴ・ガンディーという元インド首相が91年にタミル・ナードゥ州内で暗殺されたということがあり、あまりこの問題に介入することは危険だぞということで介入していないのです。しかし、現在は、ラジーヴ・ガンディー暗殺からもうすでに7年も経ち、だいぶその記憶も薄らいできたこともあり、LTTE 支持の動きがまたぞろぞろ出始めているようです。ジャヤラリターという今国会レベルで政権をとっているタミル・ナードゥ州の AIADMK の指導者も、タミル問題にインド中央政府が介入してほしいということを最近は少し言っているようで、依然としてタミル・ナードゥ州やインドの動きも無視はできないという気はします。

この問題の解決策ですが、これは非常に難しいものがありまして、中間の案を採ればいいというものでもありません。シンハラ側とタミル側の中間の案を採りますと、これはシンハラ側からもタミル側からも両方から攻撃されてうまくいかないということがあります。かといって軍事的にはどうかというと、LTTE は兵力的にはスリランカ政府軍よりも大分少ないのですが、士気がものすごく高い。LTTE は特に少女もかなり動員しているのですが、首に青酸カリを巻いていまして、捕まるとそれを飲んで自殺するという、第二次世界大戦中の日本の特攻隊のような感じの精神でいます。洗脳教育も進んでいまして、シンハラ政府軍よりかなり士気が高いのです。またゲリラ戦を展開し本当に農村に隠れてしまうと、一般のタミル人なのか LTTE なのかわからなくなってしましまして、軍事的な解決のめどもついていません。ですから、政治的な解決も軍事的な解決も両方難しいので、非常に難しい状況にあるというのが現状です。

はい。これで終わりにいたします。